

甲田の裾

KŌDA NO SUSO



2016

2号

通巻689号

松丘保養園の機関誌

まなびの杜

お陰様をもちまして、「まなびの杜講座」4回まで終了いたしました。
引き続き松丘保養園松桜会では、新たな講座を企画しておりますので、
皆様のご協力をお願いいたします。

第3回 まなびの杜講座（4月23日開催）



1. 講演「この美しい森 松丘保養園の魅力と緑の森プロジェクトについて」
樹木医 逢坂 淳先生



2. さくら保育園、藤保育園園児、近隣住民と入所者で、日本花の会青森（鹿内組、コマツ建機青森）寄贈の桜の苗木100本植樹

第4回 まなびの杜講座（5月28日開催）



1. 「伝聞 松丘保養園初代園長 中條資俊について」
松丘保養園松桜会理事 中條資則先生



2. 「松丘保養園の現在」
松丘保養園 園長 川西健登先生

主催 一般財団法人 松丘保養園松桜会

甲田の裾 平成28年2号 通巻689号 目次

第1回まなびの杜講座講演要旨

「ハンセン病医療半世紀の現場から」

… 長島愛生園基本治療科・京都大学医学部非常勤講師 尾崎 元昭 … 2

「遺品整理から見えてくるもの」

……………元熊本市現代美術館主任学芸員 藏座 江美 … 7

新任挨拶 ………………庶務班長 千葉 弘伸 … 11

新任挨拶 ………………副総看護師長 近江谷留里子 … 12

新任挨拶 ………………副臨床検査技師長 工藤 智木 … 14

リーコとの思い出 ………………三浦 喜美子 … 16

短歌 白樺短歌会 ……………… 18

思い出食堂 ………………看護師 工藤 まゆみ … 20

フィリピンハンセン病研修に参加して ………………看護師 吉田 敏朗 … 23

岩手県立大学学生よりの感想文 ……………… 29

野の花の微笑み(15) ………………比良 信治 … 35

人事異動 ……………… 39

「どうぞよろしくお願ひします」 ……………… 40

松桜会のご案内 ……………… 42

自治会日誌・編集後記 ……………… 43

表紙写真：「青空の下 桜の植樹」(6月11日 青森ロータリークラブ主催)

写真提供：福祉室

「甲田の裾」バックナンバー(平成24年1号～)は
下記ホームページより閲覧いただけます。

松丘保養園のインターネットホームページ

<http://www.nhds.go.jp/~matuoka/>

第一回まなびの杜講座講演要旨

ハンセン病医療半世紀の現場から

長島愛生園基本治療科
京都大学医学部非常勤講師

尾崎元昭

一・ハンセン病とはどんな病気か

ハンセン病は、かつて「らい」と呼ばれた慢性の感染症です。この病名に伴う偏見をなくすために、日本では「ハンセン病」と呼ぶことになっています。一部の医学用語には言い換えが難しいために「らい」という名前が残されています。ハンセン病は一八七三年に「らい菌」発見を報告したノルウェーの皮膚科医ハンセンにちなんで付けられた病名です。

この病気は「らい菌」の感染によって起ります。ヒトの体内では、おもに皮膚・鼻や口の粘膜・末梢神経で増殖します。試験管の中で菌を培養することまだできないので、動物に菌を植えて増やす「動

物接種」という方法が研究に用いられています。菌が皮膚や上気道（鼻、のど）などから侵入しても、その人の抵抗力によつて処理されると発病しません。発病しても自然に治ることもあります。たまたま抵抗力が少なく、

菌が体内で増えのを許してしまった人が病気になるという点は、他の感染症と変わりありま



らい菌の発見者：
アルマウェル・ハンセン(1841-1912)

せん。

発病には、菌・その人の抵抗力・栄養や環境などの生活状況などが関わってきます。現在の日本では、感染源となる患者さんがほとんどないこと、豊かな生活環境などから、うつる機会はまず無くなっています。伝染病とは言えない状態になっています。

二. ハンセン病医療の現状と今後

発病すると、皮膚や末梢神経、眼に病変が現れます。人の目に触れやすいところに変化が出るた

めに目立つことが、過去の偏見や差別の原因になります。菌とその人の抵抗力との関係によつて病状に差が現れ、この違いを「病型」としてとらえます。病型が決まると、どういう治療をしたらいか、どのくらいの期間で治るかといったことが分かります。病型には、WHOの多菌型（M.B）・少菌型（P.B）という病型分類と、菌への抵抗力を基にした総合的な病型分類が併用されています。

治療の基本は菌を叩く薬物療法です。かつてはスルホン剤（D.D.S、プロミンなど）が用いられましたが、現在は多剤併用療法で早く、確実に治すこと

ができるようになっています。WHOのMDTという治療プランは病型によつて治療薬と治療期間を決め、終了すると病変が続いていても治癒とします。日本では、病変が消えて菌陰性になるまで治療します。ハンセン病学会の治療ガイドラインが用いられています。末梢神経障害や眼の病変が起ると後遺症が出てやすいので、いかにこれらの病変を防ぐかが重要になります。病気が治つても後遺症のある人には、日常生活に支障が出ないように後遺症の治療と悪化の予防が行われます。

現在、日本人では年間零～二名くらい、外国人から三～五名くらいの新しい患者さんが出ています。日本人新患はほとんど高齢者で、最近感染して発病したのではないと考えられています。新患は療養所に入らず一般病院の皮膚科や療養所の外来で治療を受け、国内でまだ治癒していない人はわずかしか居ません。療養所は入所者の平均年齢が八〇才台半ばになり、日常生活の介助・健康管理・人としての交流が行なっています。日本のハンセン病は終焉期にあるといえます。

三. ハンセン病対策の歴史

日本にいつごろハンセン病が入ってきたのかは分かりません。古代の本や法律に「癪」と記されてい る病気は、さまざまの疾患が含まれていたようです。ハンセン病などの身体障害を生じる病の人を社会から排除する政策は、奈良時代から始まつて昭和まで

続きました。発病は前世の悪行の報いとの因果応報思想のために、ハンセン病の人は悲惨な状況に置かれました。鎌倉時代には仏教の僧侶による救済活動も行われています。キリスト教が入つてくると医療宣教師によつて病院や診療所が作られ、初めて「病人」と扱われるようになりますが、キリシタン禁教と鎖国政策によつてこれらの施設は消滅します。

江戸時代にはお寺が戸籍を管理するようになり、ハンセン病患者は身分をはく奪されて社会制度の枠から外され、患者は浮浪生活を送らざるを得ませんでした。家族や地域社会が患者をかくまつていた例もありました。

明治時代になつて外国からやつてきた宣教師たちが、市中に居る患者の悲惨な境遇に驚き、救済活動を始めました。宗教家たちの訴えが政府を動かし、

二〇世紀に入るころから社会政策としてのハンセン病対策が始まります。都道府県立の療養所が作られ、患者の収容が進められていますが、次第に保護よりも社会からの排除の方向へと変化していきました。昭和初期から、強制隔離して患者全員を社会から除こうとする体制が推進されます。

一九四三年にプロミンの有効性がアメリカで報告され、日本では一九五〇年代からスルホン剤による治療が普及して、ハンセン病は初めて治る病気になりました。療養所入所者の人権回復、強制隔離廃止の運動が進みますが、一九五三年の「らい予防法」改定では隔離政策が維持されてしまいます。しかし、療養所では治癒した人たちの社会復帰が進められ、所内に残つた人たちには生活保障の充実が図られ、社会との交流が広がり、予防法は実質的に骨抜きにされていきました。一方、治療薬への耐性が生じて一九六〇年代には「難治らい」の問題が深刻になりましたが、一九七〇年代以降、新しい治療薬の出現で状況は一変しました。ハンセン病が確実に、早く治せる時代が到来したわけです。

とはいゝえ隔離政策の法の下、ハンセン病は社会制

度から排除された今まで、病気への偏見は続きました。こうした状況からの人権回復が訴えられて、一九九六年に予防法が廃止されました。ハンセン病医療は一般的の医療体制に組み込まれ、ハンセン病を特別扱い、または除外してきた多くの法律が改正されました。二十一世紀になって、隔離された人たちへの国家賠償が決定されて補償金が支払われました。

入所者の療養所への居住権を認めた法案も成立し、療養所はハンセン病施設として存続することになりました。

四 不幸な歴史から学ぶこと

なぜハンセン病には強い偏見や差別が行われてきたのか、その理由を私なりに整理してみます。まだ治らなかつた時代には、人目につくところに現れる病変が人々に恐怖感を与え、排除の原因となつたと推測されます。見かけ上の変化が偏見・差別に連なる例は、ハンセン病に限らずいまも後を絶ちません。

佛教の經典に前世の罪の報い、「業病」と書かれた病気がハンセン病とされたこと、さらに遺伝病との誤解が患者だけでなく、その家族も苦しめる結果になりました。

りました。ムラ社会で画一性が尊ばれ、異質なものには排除という意識が古くからあり、ハンセン病への偏見・差別を助長しました。昭和時代前半の強制隔離時代には、社会から排除されていく患者さんへの苛酷な取り扱いが恐怖感、嫌悪感を煽つたと推測されます。

社会的には、共同体からの追放が古代から江戸時代へと続いたことが偏見・差別の基盤になりました。明治以降は病人よりも社会防衛が優先されたことが、うつる病気は怖いという感情を生みだしました。ハンセン病対策を推進した人たちが隔離の正しさを偏重したこと、偏見・差別の一因になりました。伝染性を強調することでハンセン病対策の資金獲得を促進したのもその一例です。日本が軍国主義に支配されていくようになると、伝統的な「けがれ」の思想が社会政策にも及んで、無らい県運動のような社会浄化の施策が推進されました。

治療が進んで治る時代になり、社会復帰や外来治療が行われるようになつても隔離政策の法律が維持されてきたことには「事なき主義」も影響してきましたと考えます。政策や法律を改める責任を負うより、

なしくすしに現場で実際の施策を変えていけば済むという体質が隔離政策は正を遅らせたことは間違います。偏見・差別の原因を直視し、政策を根本的に改めるのに比べて、はるかに楽で責任も取らなくて済むという姿勢はハンセン病に限つたことではないと思われます。

偏見と差別には個人的・人種的・社会的・思想的・性別などいろんな種類が挙げられますが、そうした感情を生みだす可能性は誰にでもあります。差別に苦しんだ人たちの社会である療養所の中にも、入所者間に差別や偏見がありました。日常生活に根ざした偏見・差別が生まれるには、人の心にひそむ闇が深く関わっていると考えます。慈しみを基盤にした慈善行為のなかにも、意識されない差別感が入りこんでいることがあります。善意にも偏見・差別が隠れていることを知ると、心の闇の深さを思わず得ません。

ハンセン病の歴史を顧みると、福祉政策が民間から始まつて行政に引き継がれていくこと、政策化すると本来の救済よりも効率や経済事情が優先されて歪んでいくことを教えられます。病気の苦難を克服

しようと苦しんだ人たちの生き方は一般の人々への導きや励ましになります。病気になつた人、さまざまの災害や死を体験した人々とそうでない人の間には、越えがたい深い淵があります。この淵を越えた相互理解が可能なのかどうか、共同社会が崩壊し、格差が増大、紛争が絶えない今日の社会をどう乗り越えていくのか、ハンセン病の歴史の理解が何らかの力になればと願っています。



遺品整理から見えてくるもの

元熊本市現代美術館主任学芸員 藏 座 江 美

一・松丘保養園で遺品整理を行うようになつたきつかけ

二〇〇一年に開館した熊本市現代美術館は、開館記念展「ATTITUDE2002 心の中のたつたひとつ」の真実のために」において、国立療養所菊池恵楓園入所者の遠藤邦江さんが園内で結婚し妊娠したにも関わらず、「らい予防法」のために墮胎を余儀なくされ、その寂しさを埋めるために我が子の代わりに大切にしてきた抱き人形の太郎くんを紹介しました。自分が作つた人形でもないし、美術館に展示されるようなものではないと最初は断られましたが、美術作品ではないけれどもこの美術館の「現代の美術を通して人間のありようを検証する」という基本理念、「らい予防法」に見て取れる人間の愚かさをその小さい体で示してくれている太郎くんの存在をぜひとも紹

介させてほしいという、当時の学芸課長の南嶌の想いが遠藤さんに届き実現しました。

その後遠藤さんから恵楓園内で活動していた絵画クラブ「金陽会」を紹介され、そこで描かれていた絵画を「光の絵画」と名付け、公立の美術館としては初めて展覧会を開催しました（二〇〇三年、二〇〇五年、二〇一〇年の三回）。

二〇〇七年の開館五周年記念展「ATTITUDE 2007 真に歓喜に値するもの」では、国内十三ヶ所の国立療養所、神山復生院、琵琶崎待労院、韓国ソロクト、台湾樂生院の作品調査を行い、そこで制作された絵画や陶芸、資料などを紹介しました。松丘保養園からは成瀬豊さんの絵画作品『叫び』と奥さんであるテルさんの若い頃の写真をお借りしました。テルさんの写真は展示だけでなくチラシ・ポスター

にも使用され、国内外で掲示されました。この

展覧会がきっかけとなり、成瀬

ご夫妻との付き合いが始まりました。その後二〇一三年には豊さんが、二〇一五年春にはテルさんが他界され、昨年九月に松丘保養園を訪れた際に成瀬ご夫妻の遺品が残されていることを知り、遺品整理をさせていたたまことになりました。

二、遺品整理をして感じたこと

成瀬豊さんの遺品の中には、『叫び』の下絵や年賀状用に描かれたもの、落語の台本、点字用紙を再利用したスクラップブックなどが残されていました。

ほかにも落語の元ネタや自身が落語の練習をしていて、カラオケ大会の前座として落語を披露している様子やカラオケや声の便りなどが録音された力セットテープ、VHSも五〇〇本近くありました。

成瀬テルさんの遺品には、中学生の頃に書かれた習字や絵日記が残されていました。夏休みの宿題として書かれた絵日記のようですが、園内での子どもたちの生活ぶり、夏祭りの様子、蓄音機を使ってレコードを聴いていたことや子どもたちが火の用心の巡回をしていたことなどが絵と共に残されていて、資料としても大変貴重なものです。また、絵日記のほかにも英語のノートや通知表、家計簿や詩集など



展覧会チラシ

点字の紙やカレンダー、包装紙などに下書きやスケッチが描かれたり、リングブルを使つて額を手作りしているところからは、物資がなかつた時代の名残りを感じることができます。

また、昭和三〇年代の歌舞伎やお芝居、仮装大会などの写真も多数残されていて、当時の園の様子がうかがえます。写真には開催時期だけでなく出演者の名前も裏書きされていて、豊さんの几帳面な一面も垣間見られます。菊池恵楓園入所時の写真や、恵楓園の友人からの手紙や写真も大切に保管していました。

でのダンスの様子やカラオケ大会に出場しているときの写真も残されていて、テルさんの芸達者な一面や暮らしぶりを知ることができます。

松丘保養園から全生園に透析のために転園していつた友人からの電報も大切に保管されており、たつた一通の電報からも入所者同志の強い結びつきが感じられます。

二度目の遺品整理で伺った時に途中経過をお話させていただきました。その後その話を聞いた介護員の方が、十数年前に成瀬豊さんからもらったというカレンダーの裏に手書きされた安来節の解説書を持参されたそうです。豊さんとの思い出の品でしかなかつた安来節の解説書を介護員の方がわざわざ持参したという行為からは、意識の変化が感じられます。豊さんと介護員の方の関係性が感じられる貴重な品として価値が与えられただけでなく、入所者と介護員の間に流れている時間が実は貴重で豊かな時間だということに気づくきっかけになつたのではないか。しょうか。

遺品整理は当時の様子を知ることができるという

だけでなく、介護員をはじめとした関わる人たちの意識の変化を促す品々としての価値もあるのではないかと感じさせられました。

三・松丘保養園の社会復帰について

ハンセン病の資料、記憶を後世に残すことを考えるときに、ネガティブな部分や国への批判へ傾きがちですが、療養所内では日々の生活が営まれていて、喜びや笑いも存在していたことも残していく必要があります。かわいそうな人として終わらせない。そこから人間としての強さや優しさに気づかせてもらっています。全国の入所者の平均年齢を考えると、今後どれだけの人が療養所と関わっていくのか、療養所のある地域住民しか関われないのが現実です。人生の先輩として学ぶべきことがたくさんある入所者から直接話を伺う機会をできるだけ多く、特に若い人たちに経験してもらえるよう働きかける必要があります。遺品整理をすることで知つた松丘保養園の歴史、仮装大会や落語を楽しまれていたことなどから、全国の療養所の中でもアクセスが良い松丘保養園をエンターテインメントが楽しめる場として社

会復帰できないか妄想も含まれていますが考えてみます。

- ・落語大会

成瀬豊さんの落語の台本を青森県内にある落語研究会などで公演してもらう。

- ・歌舞伎や演劇祭

生で観る機会の少ない歌舞伎やお芝居を楽しめる場づくり。

- ・コンサートやダンス

園内にあつた楽団が昔演奏していた曲を近くの中学生に演奏してもらう、など。

- ・仮装大会の復活

夏の一大イベントであつたであろう仮装大会を地域の皆さんと復活させ、松丘保養園の名物イベントにする。

- ・百人じょうすくい

成瀬豊さんの安来節解説書を元に、園内スタッフのみならず、近くの小中学生や大学生など多くの地域住民を巻き込んで行う。

夢物語のように思えるかもしませんが、視点を変えるだけで出来ることは山ほどあり、遺品整理から考えるきっかけを得ました。入所者が一〇〇人を切つてしまつてゐる松丘保養園ではありますが、今後地域住民の方々と連携を取りながら、まずはできることから始めていけるのではないかという期待を持つっています。



遺品整理で見つかった写真
豊さんとテルさん(昭和36年1月8日)

新任挨拶

庶務班長 千葉弘伸

この度、四月一日をもちまして、当国立療養所松丘保養園に異動になりました千葉弘伸と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

私の出身は北海道の釧路市で、有名なものとしては海鮮（以前は日本一の漁獲高）と石炭（これも昔に炭坑の町として知られていた）でしたが、どちらも衰退し人口減の一因となつております。観光としては釧路湿原、鶴居村の丹頂鶴が有名で近隣では川湯温泉・弟子屈温泉（摩周湖）・阿寒国立公園（阿寒湖）のマリモが有名です。高校を卒業するまで、この町で育ちました。

最初に国立病院に採用された赴任先が国立弟子屈病院で、その後国立療養所稚内病院、国立療養所西札幌病院、国立病院機構八雲病院、国立病院機構札幌南病院、国立病院機構帶広病院を経て、初めて海を渡り、東北の施設で勤務することになりました。

ただ、青森には二〇年ほど前に子供を連れて、「ねぶた祭」を観に来たこともあります。今思うと何かの縁があつたのかもしれません。

これまで、平成十六年以降は国立病院機構の制度の中で業務を行つてきましたので、ハンセン病の施設での勤務は勿論初めてで、他の施設とは一線を画していく、驚くことがたくさんあります。

私自身、入所者の方々に直接的に関わることは出来ませんが、入所者をサポートする医療者等の方々へのサポートを通して、入所者の方々が心地よい毎日を送ることができる様、微力ながら努めて参りますので、よろしくお願ひいたします。



新任挨拶

副総看護師長

近江谷

留里子

おうみやるりこ

この度、平成二十八年四月一日付で、青森病院から昇任となりました副総看護師長の近江谷留里子と申します。どうぞ宜しくお願ひ致します。近江谷という名字は滋賀県（近江）と関係があるのかと、よく聞かれますが関係は不明です。名前は、「ル」「リ」「コ」と言いにくく、あまり好きな名前ではありませんでした。どうせ父親が当時ファンであつた女優の名前を安易に付けたのだと思い込んでいました。しかし、高校生になつて父親に直接名前の由来を聞いたところ、「瑠璃も珠も磨かざれば光なし」宝石も磨かなければ光らない。という意味を込めて付けた名前であることが解り、父に申し訳ないという思いと同時に、期待が込められた名前であることを知り、とても嬉しく思いました。それまで田舎の野山を駆け回り、勉強もろくにしないで遊んでばかりいた私でしたが少しづつ変化していくました。高校では恩師である諸先生に巡り合い指導を受けました。その甲斐あって看護学校を経て現在に至っています。

前任者であつた丹藤副総看護師長は看護学校の先輩であり、同じ寮で過ごしました。また、上野看護師長は後輩にあたります。以前から先輩・後輩という間柄で弘前、仙台と同

じ職場で働かせていただき大変お世話になりました。また、八戸病院時代の思い出は3・11の震災です。電気が復旧しない病院に泊まり込んで不安な二日間を過ごしました。その時、病院の陣頭指揮を執つていたのが現事務長である菅事務長でした。その翌年、現天内総看護師長が昇任で副総看護師長に、同じく配置換えで寺嶋看護師長が弘前病院から八戸病院に赴任しました。このように職員の皆様とは何かと、ご縁があり松丘保養園は初めて勤務する場所で不安な気持ちはありましたが、知っている人が多いことから心強く思い赴任しました。

これまで松丘保養園についての知識は、同僚の看護師長から話を伺う程度でした。しかし以前、神谷美恵子著の「生きがいについて」（みすず書房）を読んで、長島愛生園の皆様に関心を寄せることができました。神谷先生は結核を患い完治した後医師を志し、精神科医として念願である長島愛生園に勤務することになりました。その後七年の歳月をかけて編集した「生きがいについて」を出版されました。その本は私にとつて看護師として働く意味や生きがいとは何かを考える示唆を与えてくれた大切な一冊でした。今回、原稿依頼されたことで、久しぶりに読み返すよい機会となりました。著者がその本の中で長島愛生園等の保養園で働くことは私の大きな生きがいの一つであると述べています。

私も副総看護師長として松丘保養園の入所者ひとりひとりの歴史や思いを知り、入所者の皆様の生きがいや保養園で働く職員のやりがいを少しでも支えることができれば、それが私の仕事のやりがいに繋がっていくことを信じて過ごしていきたいと思っています。



新任挨拶

副臨床検査技師長

工

藤

智

木

この度、四月一日をもちまして、独立行政法人国立病院機構青森病院より異動になりました工藤 智木と申します。どうかよろしくお願ひします。

私の出身地は藤崎町です。ご存じの方もおいでになるかも知れませんが、リンゴの「ふじ」のふるさとです。家族は妻が一人に今年二十歳になる息子が一人おります。

私は高校を卒業後、十和田市にあつた検査技師の専門学校に入学しました。その時に同級生だったのが、前任の技師長の杉本さんで、その当時よく将棋をさしていました（いつも私の完敗でした）。

最初の勤務は、民間の病院等で約一〇年間（三施設）勤務の後、非常勤勤務ですが、国立弘前病院、次の国立仙台病院で採用となり、国立盛岡病院、国立弘前病院、国立盛岡病院、国立青森病院と転勤がありこの度、松丘保養園に着任しました。就職した当時はまさか通算十施設に勤める人生だとは夢にも思いませんでしたが、それはそれ

で、いろいろな経験が出来て、マンネリになりやすい自分には程よい刺激を与えてくれているように思います。

さて、松丘保養園の第一印象は「とにかく広い」でした。方向感覚はいい方だと自信していましたが、異動して約一か月経った今でも、迷子になりそうになります。ある人に聞いたところ一年くらいかかるそうで、昼休み中にでも園内を散策して迷子にならないようしたいと思います。

最後に松丘保養園やハンセンについては、地元なのに新聞等の記事を読むくらいで、じつのところあまりよく知りませんでしたが、ここに来てハンセンの歴史と現在の状況を知ることが出来ました。まだまだ前任の技師長に人間として検査技師として遠く及びませんが、入所者の皆様の健康維持のため、全力でサポートしていくたいと思しますのでどうぞ宜しくお願いします。

リーコとの思い出

三 浦 喜美子

平成十四年十二月下旬、今の寮に引っ越してきました。隣りの部屋にリーコという猫を飼っている夫婦がいました。

ある時、そのリーコを見て驚きました。あの目は日本の猫の目ではありません。可愛い顔にあの美しい目、猫嫌いの私は、相性が合うような気がしました。

外を見て、リーコが居ると、「家に遊びにおいで」と声をかけましたが、知らん振りされました。玄関の戸を少し開けておけば、気が向ければ遊びに来てくれると思っていました。ある時部屋に入つて来た時は嬉しかったです。

それからしばらくして、また遊びに来て、「よく來た」と言うと又隅々を歩きます。私は『検査員』と名付けました。帰る時は、「検査員だから又来てね！」と声を掛けましたら振り向きました。人の言葉が分かるのかと驚きました。

ある時、飼い主の方が、リーコが来てないかと探しに来ました。見ていないし、来ていません。ところが、洋服タンスの中から出てきたのには驚きました。飼い主の声がしたので、出てきたのでしょうか？すぐ帰つて行きました。

外で見かける時は必ず声をかけますが、何時も知らん振りです。ある時私が外出した時、リーコが入つて來たとの事。主人が家の人が心配するから、と言つたところすぐ帰つたとのこと。主人も人間の言葉がわかるのかと大変驚いたと言います。それ以降我が家に來ることはなくなりました。

ある日、手押し車の上に座つて移動している姿を見かけました。「リーコ、楽でいいな！殿様だ！」と声を掛けました。

寒い日は毛布を掛け、雨の日は傘を差して貰う、なんと幸せな猫、と思いました。

ある日移動している際に目を離したらリーコがいなくなつたと、青い顔して探しています。沼の方まで行つてみたがいなかつたとの事。遠くまでは行けないと、私も探しました。すると、私の物置小屋から出てきました。風を入れる為、私は少し戸を開けていたのです。飼い主が、「リーコが見つからないと、私生きていけない」と言つたのには驚きました。本気ではないにしても、如何に大事にして日々過ごしていたのかわかります。洋服タンスから出来たこともあり、リーコにはユニークな面もあつたのです。

平成二十八年の二月のある寒い朝、リーコが散歩している時に会いました。「しばらく振りだね。顔小さくなつたね」と声をかけたら、飼い主は食べなくなつたと心配していました。
その二、三日後に亡くなつたそうです。

十七年間夫婦と一緒に生活したと聞いて驚きました。猫の寿命はこんなにも長いとは知りませんでした。残念なことに私はリーコの鳴き声は一度も聞いたことがありませんでした。鳴く必要がなかつたからでしょう。

リーコが亡くなつたと同時に、また猫嫌いの私に戻りました。



手押し車の上におとなしく座り散歩するリーコ。本名は『リン』ですが、リーコ、レイコなど様々な愛称で親しまれていました。

短歌

白樺短歌会

父も叔父もこの園に死す

滝田十和男

父も叔父もこの園に死す残されしわれの余生を見守りてゐむ
これの大正・昭和・平成と見続けて来ぬ病みほろぶ身に

汚れたる雪の下なる側溝を流るる水の早や春の音

いつもより早く萌えたる青草のまばらなれども確かなる春

雪溶けてそろそろ土手に萌えそめし土筆つくりみるとて車椅子押され

老い坂の誰もが嘗める苦しみと思へど辛し足腰起たぬは

ヘルニヤを元凶とする足腰の痛みこんなに激しいものか

足腰の痛む体を折り曲げて辿り着くまで待て車椅子

一つ刻を眠りに墮ちし真昼間の部屋にテレビの独りお喋り

痛む足ひきずり歩む五六歩が限度となりてはや二月経ぬ

居座りつつトイレに向かふ我が前に迷ひし蟻の行き戻りする
敏捷に身をひるがへす黒蟻に及びもつかぬ吾がへたり足

立つとして身を起こすときヘルニヤの脚の先まで痛みの走る
暫くを耐ゆれば痛みの去りゆきし何時もの如くゆかぬ今年は
重ねきし老いの極みに身の回りすべてをひとの手にゆだね生ぐ
仲々に咲かぬ桜の樹を仰ぎ話し掛けてみぬ車椅子寄せ

朝の戸を開け貰いたる目の前に桜ほつほつ咲き始めたり

居ながらに庭の桜の真盛りを独り占めして朝戸開け置く

咲き競ふ庭のめぐりの老桜に至福の刻の我をつつめり

いのちあるものの力の漲りを躍らせ花を揺らす風吹く

散りかけの桜幾日も保たせて寒冷前線座りつづける

三台目なるワープロの不具合もわが老いざまに歩調合はすか

思い出食堂

看護師 工 藤 まゆみ

満開だった桜も散り、風が温かく感じられるようになつた五月十八日、一般寮レクリエーションの企画で「思い出食堂」をオープンしました。

「思い出食堂」は昔食べた懐かしい料理を入所者から職員が教えてもらい、一緒に作つて、ご馳走する食堂です。今回は坂本栄子さんのいも餅と浜野あや子さんの三平汁を「昔はああだつた、こうだつた。」などと思ひ出話をしながら作りました。

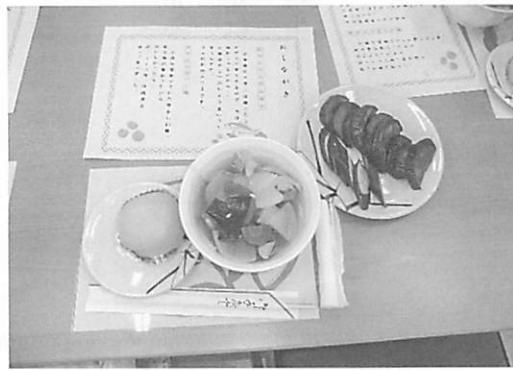
いも餅は茹でて潰したじやがいもに、でんぶん粉を混ぜて練つた生地であんこを包み蒸かします。10kg程の大量のじやがいもを茹でる前に三人で皮剥きしましたが、坂本さんはピーラーを上手に使い、包丁で剥いた職員二人を横目にものすごい勢いで剥いていました。

でんぶん粉を混ぜる時は、でんぶん粉の量によつて生地が柔らかすぎたり、割れてしまつたりするそうです。

「まだだ、まだだ。」
と言いながら生地の硬さを微調整する坂本さんの姿は、まるで匠のようでした。

職員が「先生、教えて下さい。」と言えば、坂本さんが「先生って言えば教えない。」などとやりとりをしながら、とても楽しそうでした。

生地であんこを包む



本日のメニューは「三平汁」と「いも餅」

のは、なかなかコツのいる作業で「団子を作るようやるのさ。」と教えられたものの職員は団子を作つた

ことがなく、それを知った坂本さんと浜野さんはびっくりしていました。見よう見まねで包んだいも餅は生地が厚く形が歪になつたり、あんこがはみ出てしまつたりとそれぞれの個性があらわれ、みんなで大笑いし、この日一番の盛り上がりでした。三平汁担当の浜野さんも楽しそうな笑い声に誘われて三平汁の鍋を職員に預け、いも餅作りに参加し、楽しそうでした。生地は汁物に入れたり、バター焼きにしても、美味しいよと教えてくれました。坂本さんが、いも餅を最後に作つたのは十勝沖地震があつたころだそうで、教え



坂本先生（中央）より「いも餅」の包み方を教わる

て欲しいと頼まれた時は、長い間作つていなかつたら作れるかなあと戸惑つたと言つていましたが、作つているうちに昔の感覚は完璧に戻つていました。

三平汁は北海道の郷土料理で、本来は糠にしんとさげで作るそうですが、ささげは時期でないと美味しくないからという浜野さんの意向で、今回は鮭と大根、人参、じゃがいもで作りました。北海道では、これを「おしょう煮」と言うそうです。ガスコンロから、はみ出すくらいの大きな鍋に30人分程度の材料を切るのは大変でしたが、「何切りにする? どれくらいの大きさ?」「こんな感じでいい?」などと言いながら「みんなでやると楽しいね」と台所は活気に満ちていきました。材料が多く、限られた時間で出来るかどうか不安だった職員が、材料を前もつて切つておきたいと浜野さんに提案したところ、「それでは美味しくなくなる。」「味がしみる時間も考えて、12時から作りたい。」と言わられ、浜野さんの出来るだけ美味しく食べてもらいたいという料理人魂に同じ主婦として頭が下がりました。材料を加えるタイミングを確認する為に、奥の和室でいも餅作りに参加している浜野さんを呼ぶと「はい、はい、はい。」と言いながら少し誇らしげで、楽しそ

うに小走りでこちらに向かう姿が印象的でした。

野菜と鮭のだしが出て、程よい塩分の三平汁とあんこが入つてもつちりとしたいも餅はとても美味しく出来ました。

料理を食べに来てくれた入所者の中には、「甘いものが好きだ。」とあつという間にいも餅を食べてしまつた人、ビールや酒を持参し、一杯呑みながら料理を味わっていた人もいて、あちらこちらで話が盛り上がり、三平汁が「炊事のより美味しい。」「次は、きりたんぽだな。」などと嬉しい声が聞かれました。田中さんに「いつものあや子さんの味が出ていますか?」と尋ねると「そんなの分かんねーよ。」と笑つてしましたが、田中さんの汁椀は、ほとんど空で、ドツと笑いがわきました。

自分の料理を教える喜び、教えてもらいながら一緒に作る楽しさ、食べて会話がはずむ活気で「思い出食堂」は大好評でした。



「ごちそうさまでしたー!!」美味しいものを食べると自然と笑顔に!!

フィリピンハンセン病研修に参加して

看護師 吉田敏朗

この研修は笹川記念保健協力財団の理事長、喜多悦子先生の引率により行われました。財団は、昭和四十九年に世界のハンセン病対策のために創設されました。当時一、二〇〇万人以上とも推計されたハンセン病患者の数を、笹川陽平会長による無料MDTと言われる多剤併用療法の薬剤配布等により、二〇一三年には年間新規診断患者数二二九、〇七五人まで減少させることが出来ました。

しかし、年間発症者数一、〇〇〇人以上の国は十四カ国もあり、過去十年間、患者数増減はほとんど改善していません。加えて、回復者の高齢化、病気に伴う障害、この疾患を巡る差別や偏見などの人道的問題は多くの国々で執拗に続いていること、その実態すら不明な地域があることも明らかになっています。

わが国ではほとんど新規発病者がいないことから、専門家と云えども臨床例に遭遇することはまれで、医師のみならず、看護師もその機会に巡り合うことは皆無に近い現状です。笹川記念保健協力財団は毎年、多数国のハンセン病療養所や回復者団体への支援を行っており、そこで今回は、諸外国のハンセン病の現状にふれる交流の場として、フィリピンのハンセン病に関する歴史と現状を学ぶ研修に参加させていただきました。

フィリピンは約三十万キロの面積を持ち、南北に一、八五一kmにわたつて散在する大小含め七、〇〇〇あまりの島からなります。首都はマニラで、公用語はフィリピン語(タガログ語)・英語が使われています。日本との時差は+一時間です。通貨ペソで現され(ペットボトルの水500mlでおよそ40ペソ)、人口は一億人ほど、平均寿命

六十八歳となっています。アジアの途上国の中でも都市化が最も進んだ国の一つですが、貧富の差が激しく、職を求めて都市部に流入する人が多く、貧困撲滅が大きな課題となっています。

今回のフィリピンハンセン病研修の日程は二〇一五年十一月七～十三日までの一週間で、マニラ、クリオン島、セブ島を巡る研修でした。

十一月六日、成田空港を十四時に出発し、十七時過ぎにフィリピンのマニラ空港に着きました。飛行機から降りた瞬間から蒸し暑い首都マニラは、とても人が多く、路上で商売をしている人やそれを買う人、バスを待つ人の長蛇の列、密集する車やバイク、ひつきりなしに鳴るクラクションなど、人々の生きるエネルギーで溢れいる感じがした首都マニラでした。喜多先生から『戦後の日本もこうだった』という話がとても印象的でした。フィリピン初日は移動で終わりました。

二日目はクリオン島の見学でした。周囲とのつながりもなく、元々島に住む人数も少ないとその人たちを移動させやすい、十分な真水を確保でき、患者が農業に従事するのにも適していることから、この島が選ばれたそうです。「生ける死者の島」と呼ばれ、ハンセン病隔離

政策の世界的象徴とされる島で、長島愛生園はこの島をモデルに作られたそうです。

クリオン療養所・総合病院院長のDrクナナンの案内でクリオンミュージ

アムを見学しました。Drクナナンは、

ハンセン病を患つ

てクリオン島に隔離された祖父母か

ら産まれた母と、

マニラで発症して

クリオン島に隔離

された父の間に産

まれました。クリ

オン島で生まれ育

ち、恩返しのため

この島でハンセン

病へのさまざまな

活動をしています。

ミュージアムの壁

には一九〇〇年前



半のクリオーン島のハンセン病患者で溢れていた当時の写真、結婚、出産、子供達、治療風景などの様々な写真や絵が飾られていました。

すぐ隣にあるクリオーン療養所総合病院の見学では、現在は発症している患者はおらず、後遺症のリハビリなどで入所されている患者ばかりでした。クリオーン療養所でも患者の高齢化による将来構想が問題となつているそうです。

入所者の中に二十才の男性がいました。その方は、一

家が家を持たず海で船の上で暮らすバジャウ族と呼ばれる民族の人でした。火傷が治らないことで診てもらつたところハンセン病が発覚してクリオーンに来たそうです。この時に両親はこの男性を置いて蒸発してしまつたそうです。クリオーンは元ハンセン病の患者からなる島のため周囲の病気への理解はありますが、クリオーン以外となるとまだ差別や偏見の眼が根深いことを改めて実感しました。この男性は字の読み書きも出来ないそうでした。病気は治りましたが、就労支援が次の課題となつているそうです。クリオーン療養所は、クリオーン島内での総合病院としての役割も担っています。他には内科、外科、産科、小児科とありました。

Drクナナンより、『クリオーンは今、ハンセン病の島としてだけでなく生活、支援の面で広く収容施設から地域に貢献した施設になることが出来ました。クリオーンは世界的に、サモアなどにもこの経験を共有しています。クリオーンは今、ハンセン病から解き放たれた時代にきました。フィリピンはいまだに年に二、〇〇〇人ほど新規発症患者がいます。今後も正しい治療や技術を他の施設にも根付かせなければならない』と話されていました。

三日目の研修は国連機関、WHOでした。WHO加盟国は世界で一九四カ国あり、六つの地域に分かれ、フィリピンは西太平洋事務局、WPRO、略してウブロ、と呼ばれる地域に属しています。一九九〇年代は一万五、〇〇〇人いたハンセン病の新規患者も二〇一三年には五、〇〇〇人に減り、過去二十年にわたっては一貫して減少しています。しかし、WPROの中でミクロネシア、キリバス、マーシャル諸島の三つの途上国では人口の割合に比べ非常に多く、十万人に対して一〇〇人を越えるほどの発症率を示しています。この三カ国は特に家族内感染が多いとのことでした。WPROの国々の状況は大きく二つに分かれ、すでに急速に減少している

国と、いまだにハンセン病の基本的サービスが十分行き届かず、減少していな国に分かれています。そういつた国々には特に基本サービスの充実が必要です。すでに減少している国でも、パプアニューギニアやフィリピン等、国レベルでは減少しても州レベル、地区レベルのデータではまだ

まだ新規の患者数は出ているので、注意深く分析していく必要があります。



四日目は再びマニラに戻り、フィリピン総合病院の一九九八年に設立されたハンセン病患者会「ハンセンズクラブ」の見学をしました。この団体は疾患教育の場を提供し、会員のセルフケアを高めることを目的に設立されました。同じ病気に苦しむ患者同士が交流の場を持ち、孤立した生活をさせない、差別や偏見を減らし、自信を取り戻すことでもあります。最終的には、患者により運営される患者のためのハンセン病クラブを通して、ハンセン病患者の一人一人が発展や改革に必要な力をつけることを目標としています。しかし、来られる方はこのフィリピン総合病院の近くに住んでいて比較的交通アクセスの良い人や、ある程度金銭面で余裕のある人だそうで、実際に集まつてくる人はまだ少なく、治療のために何時間もかけて来ているという方も多く、金銭面で生活が苦しいために仕事が優先されたり、根深い偏見のため参加出来ていない人も多いそうです。そのため、途中で治療をやめてしまう方も多いそうです。ハンセン病の患者の半分は家族に見捨てられたり、診断されたショックでうつとなり、自殺しようとする人も多いそうです。クリオンのようにハンセン病の島では病気に対し理解はありますが、マニラなど他の地域ではまだまだ偏

見や差別も残つており、心のケアも、とても重要な一つです。

五日目は飛行機でセブ島のハンセン病療養所、エバー

スレイ・チャイルズ療養所を見学しました。一九三〇年レオナルド・ウッド少佐とエバースレイ・チャイルズによって設立された療養所です。十代の子供から六十歳代まで、男性八十二名、女性四十三名、計一二四名が暮らしていました。その中で五十名ほどの人が介護、清掃、事務所のサポート、大工、電気技師等で賃金を得ています。

多くの入所者がおりますが、ここではほとんどの人々がここで生活することを望んでいます。ハンセン病の検査で陰性、又は身体的に健康な入所者へ、退院へ向けての金銭的フォローを行いましたが、多くの人は自分の家族や地域社会からの差別から逃れるため、ここに滞在することを望んでいるそうです。この療養所は多くの入所者にとって第二の自宅、又は終の棲家となつてているそうです。退院した人もまた、職業や生活の糧を得ることができます。そして療養所は、差別や偏見を遠ざける場と

しての役割以外に、高齢者や重度のハンセン病の後遺症の残る人へのリハビリや治療、介護の場としても重要な一つです。

最終日はセブスキンクリニックです。ここでは日本で見ることの出来なかつた今現在もハンセン病の治療をしている患者を見学することが出来ました。毎年一六、〇〇〇人以上の患者に対してサービスを提供し、その中から一%の約一六〇人の新規のハンセン病患者が発見されています。そして毎年一、〇〇〇人以上の患者が治療を受けています。ここはハンセン病の治療の場としてだけでなく、国内外の約二〇〇人の医師が毎年この施設で訓練を受け、八〇年以上ものあいだハンセン病の診断、治療、研究のための施設として伝えられてきました。ここで子供から大人まで、軽度～重度のハンセン病患者と、その患者のスマア検査、顕微鏡検査見ることができました。順番待ちをする患者の多さにただただ驚くばかりで、セブ島の現状を垣間見ることとなりました。

午後はラプラップ市というところの地域保健所を視察しました。地域保健所と言いますが、診療等幅広く行つてます。

います。ラプラップ市ではハンセン病以外に、高血圧や糖尿病等の生活習慣病、 Dengue熱が問題となっていました。 フィリピンはカトリックのため、人工中絶というのはまもなく、そのため若年層の妊娠も問題となっていました。 ハンセン病の検査も行われていました。その時来ていた女の子は、母親がハンセン病で鷺手となっていました。 その子の右肘に皮疹が出て、もしかしたらハンセン病なのではないか? ということで診てもらいました。 母親は、鷺手という障害が残つてしまつた発見が遅れた結果で、もっと早く治療をしていればこのような障害は残らなかつた、薬を飲んだからといって鷺手は治らない。 この女の子は初期症状がすぐにみつかった良い例で、出来る限り進行させたくない、早期発見、早期治療が大切だという話でした。

今回のフィリピン研修で、差別や偏見の問題は、クリオーンはもちろんのこと、セブ島周辺もハンセン病への理解はまだありますが、マニラなどはまだ根強く、フィリピンでは今も尚ハンセン病の問題はとても大きいと実感しました。日本は今、新規のハンセン病患者は年間一人程となっていますが、フィリピンでは日本では見

ることが出来ない、新たに発症しているハンセン病患者を見る事ができます。このような研修に参加できたことは大変貴重でした。松丘の入所者九十一名一人一人にたくさんの歴史があつて今があり、フィリピンと同じようにさまざま大変なこともあつたと考えると、感慨深いものがあり、こうして学ぶ事で改めてハンセン病を風化させてはいけないと感じました。今後もこのような研修が継続して行われることが大切であると実感しました。

岩手県立大学学生よりの感想文

昨年（平成27年）2月24日、岩手県立大学社会福祉学部准教授田中秀一郎先生に引率されて、学生4人が松丘保養園を訪問し、園内見学や講演、入園者との懇談など有意義な時間を過ごしました。

後日、感想文が届きましたので、学生たちの素直な

感想をご一読ください。

社会福祉学部 准教授 田中秀一郎

先日は、ご多忙のなか施設見学および川西健登園長先生や根岸章さんや滝田十和男さんのお話を直接伺う貴重な機会を設けていただき誠に有難うございました。施設見学は自治会長である石川勝夫さんのご案内により詳しくご説明いただくとともに、今回は宗教施設（教会、寺院）を拝見させていただき、これまで療養所内で生きてこられた方々と向き合う貴重な機会となりました。また根岸さんと滝田さんのお話をそれぞれ聞くことで、これまでのお二人の生き方を相対化して理解することに繋がったようになります。加えて、川西先生の「われわれもまた差別しているのではないか」という問題提起は私にとって今でも折に触れて考えさせられる言葉となっています。これはハンセン病問題にとどまらず、様々な現実問題（特に人権に関する問題）にも当てはまると思われます。これからも折に触れて自問自答し、時に立ち止まりながら生きていくことでしょう。

（平成27年11月20日記）

社会福祉学部三年 高橋奈々子

先日は、貴重な時間を割いていただき、本当にありがとうございました。ハンセン病の方とお会いするのを初めてでしたし、入所者の方から直接語られるお話を聞くことができ、非常に有意義な時間となりました。また、ハンセン病自体についても合わせて講義してくださいつたり、実際に暮らしている施設内外について詳しい説明を加えながら案内していただけたりして、理解が深りました。

今回保養園に伺わせていただくことになり、ハンセン病をゼミで取り上げるまでは、どうしてハンセン病にそこまで偏見があるのか疑問に思っていました。そして、歴史を学んでいくうちに、「らい予防法」や「無癖県運動」等によつて、ハンセン病の方がいかに過酷な状況下に置かれていたかを知り、どうしてハンセン

病だけ国の施策として過剰な隔離政策が行われたのか、さらに疑問が生まれました。そのことについては、今回のお講義で改めて考えを深められたと思います。第一回国際らい会議で「適切な治療法の存在しない現在、感染症であるハンセン病の地域への蔓延を阻止、予防するには患者隔離しか方法はない」と決議されたのは事実ですが、日本の問題点は、ハンセン病の感染力の薄さが判明した後も、長い間隔離政策をやめなかつたことにあると考えられます。そして、それこそが患者のためだと思われていたということが現在に続くこの状況に至らしめているのだなと感じました。

施設を見学させていただいて、印象に残っているのは宗教に関する建物（教会や寺院）が充実していたということです。入所者の方々はそれぞれ自らの意思のもと選択した宗教を信仰しているような印象を受けました。このようにすべての入所者ではなくとも信仰心を持つていてることは裏腹に、死後納骨されたものが誰のか特定できないものも一部あるということを知り、やりきれない気持ちになりました。ですが、滝田さんのお話の中で、私たちのように若い世代の者が興味を持つことは非常に嬉しいことで、もつと自分たちについて知つてほしいということをおっしゃっていたので、

今回の学びや語り、そして実際に自分自身で見たことや聞いたことを心に刻まねばなど感じています。

最後に、園長先生の話の中で、差別や偏見の力が強かつた故に入所してよかつたという方もいるとのことでしたが、このような状況に置かれ、やむを得ず、合理化しているようにも感じられるので、人によっては一生施設内で暮らざるを得ないということの重さを痛感しました。それだけ法の拘束力は強く、運用するには細心の注意が必要だと改めて感じます。入所者の高齢化は著しく、このような施設の入所者も数十年後にはいなくなることが予想されますが、ハンセン病の歴史をすべて過去形にせず、ありのままの歴史を受け止め、繰り返さないようにすることが生きている者の使命なのだろうと思います。

社会福祉学部三年 久保一樹

先日の松丘保養園の施設見学と職員や入所の方からのお話は、私にとって非常に貴重な経験でした。最初は福祉室長の高山さんと自治会長の石川さんに松丘保養園の敷地内を案内していただきました。施設は、スロープや音声アナウンスなどのバリアフリー化が進んでおり、高齢の利用者の方にとつて過ごしやすい場

所だという印象を受けました。また、寺院や教会を見学させていただいた際は、石川さんに各宗教についてのお話を聞かせていただきました。施設に入所していな人々にとつては、心の拠り所としての宗教が必要であり、園内に寺院や教会があることで救われた人もいたのではないかと感じました。

午後には、川西先生からハンセン病や松丘保養園の概要・歴史について説明していただきました。ハンセン病についてはゼミで一度取り上げてはいましたが、病型や統計については詳しく触れていたことがあり、よりハンセン病についての理解を深めることができたと感じています。その中で、隔離を行つていた当時は、施設内にはハンセン病の専門医しかおらず、医学知識の偏りによつて多くの結核死亡者が出てしまつたという話を聞きました。一つの分野の知識だけでなく、総合的な知識を持つということは利用者のために必要なことであると感じ、このことは福祉職にも言えることだと考えました。

その後は、根岸さんと滝田さんからご自身の体験と想いについてお話を聞かせていただきました。根岸さんは、給食や清掃当番を隔週で交代して行つてしたことや食事環境など、当時の生活についてお話を伺

いました。お話をから当時の具体的な生活の様子をイメージすることができました。滝田さんからは、宗教のお話や施設から脱走した時のお話を聞かせていただきました。また、当時は避けられていたのに、今はハンセン病について関心を持つ人が増え、実際にこうして会いに来てくれる若者がいてくれて嬉しいといった話を聞いて、この経験をただの経験で終わらせるのではなく、自分に何が出来るのかを考えていこうと思いました。以前にハンセン病について何冊か文献を読みましたが、その中では徹底された隔離や自由の制限について書かれていました。しかし、お二方の話では、入所者同士の結婚や宗教活動など、ある程度施設内の自由が認められていたように思われ、文献とは食い違う部分があると感じました。のことから、メディアの情報を全て鵜呑みにするのではなく、実際に自分の足で現地に赴き、当事者からお話を伺うことが重要であるということに気づかされました。今回お二方からお話を聞いたことは、事実を知るという意味で非常に貴重なものであつたと感じています。

最後になりますが、福祉室長の高山さん、自治会長の石川さん、園長の川西先生、そして入所者の根岸さん、滝田さん、お忙しい中貴重なお話を聞かせていました。

だきありがとうございました。今回の施設訪問は、考えさせられることが多くあり、自分自身の成長にもつながったと感じています。機会があれば再度訪れたいと思っているので、その時はまたよろしくお願ひします。

社会福祉学部 三年 佐藤拓也

今回、初めて松丘保養園を訪問することができ非常に貴重な体験をすることができたと感じています。はじめて自治会長の石川さんから園内を案内していただきました。園内の寺院や教会も見学したり、ご自身の体験をお話してくださつたりと机上の勉強では分からぬ貴重な機会であつたと考えています。特に印象に強く残っていることは、ご自身を含めて車を運転する方もおられるということです。訪問以前は、園内に郵便局や売店があるという情報を把握していたため、生活は園内だけというイメージがありました。しかし、石川さんのお話を聞き、実際の生活がどのようになっているのかを理解することができました。午後からは、川西園長のお話を聞くことができました。ゼミで一度は触れたものの改めてお話を聞き、ハンセン病の歴史や病状について理解することができました。特に海外

では、今もなおハンセン病に罹ることがあり、地域によつては必ずしも全ての患者を把握することができないという現状もあることから日本のみならず世界全体で考えていかなければならぬと感じました。また、ハンセン病の患者は、結核も併せて罹ることもあるためハンセン病だけを診るのではなく、総合的に診る必要があつたというお話をあり、ハンセン病そのものが差別されてきた要因の一つでもあつたのではないかと考えました。

さらに、根岸さん、滝田さんから当時の生活についてもお聞きすることができました。お話を聞き驚きだつたことは、入所が強制ではなくかつたり、完全に外部との関係を断たれていなかつたりといった事実が存在していたことです。訪問以前は、ハンセン病患者は、無らい県運動をはじめとした強制入所が当然であり、長い間監禁されていたのではないかと考えていました。しかし、実際は、家で過ごす期間が存在したり、脱走をしていたりと完全に監禁されていたわけではないという事実を理解することができました。こうした事実を知ることは、ハンセン病の歴史を再認識することにも繋がると思います。また、滝田さんに「今の若い世代に伝えたいことは何ですか」と質問した際、「学生が

話を聞きに来てくれたことに感謝している」との返答がありました。この「感謝」という言葉に感銘を受けたとともに、私たちがさらに理解に努め将来に伝えていくことが必要であると考えました。机上の学びだけでは決して理解できない事実を実際に訪問し、見て、聞くことで学ぶことができました。仮に訪問しなかつたとしても自分の人生が大きく変化することは無いのかもしません。しかし、実際に訪問することによって当事者の方の人生に影響を与えた、社会に影響を与えていたりできるのではないかと感じています。そのため、そういう意味では今回の訪問には、大きな意義があつたのではないかと考えています。

最後になりますが、今回、担当していただきました自治会長の石川さん、園長の川西先生、根岸さん、滝田さん、そして今回の訪問につきまして調整・サポートしてくださいました福祉室長の高山さんに感謝申し上げます。貴重なお時間ありがとうございました。

社会福祉学部 三年 藤村咲綺

私が初めてハンセン病について知ったのは大学一年生の時です。そのとき授業で見たビデオでは長年療養所で生活している方に密着していました。昔のように

療養所に居続けなくともよくなつたにも関わらず、その方はずっとそこで生活していました。たとえハンセン病についての誤解が社会の中で少しづつ解かれていつても、療養所での生活はあまりにも長く、そこで暮らしてきた方にとってはそこが終の住処となつていいのではないかとその当時は率直に思いました。しかし、今回実際に会って話を聞いてみると、過去から現在までの時間の経過だけではなく、それとともにさまざまな思いがあつて今の生活を営んでいることが分かりました。そのことを知ることができたという意味でも、この訪問はとても有意義なものとなつたと思います。

療養所で暮らしている方のお話は、一人ひとりの歴史も含まれていて、リアリティがありました。その場にはいなくても時代背景や療養所での暮らし、文化について、私自身鮮明に思い浮かべることができました。園長先生もおっしゃっていたように、資料によつてしか把握することができない全体の事実だけではなく、個人の語りによつてその事実を聞いて受け止めることに意義があるのではないかと感じます。その方の語り方によつて私たちに伝わってきてるので重みがありました。内容についてもつとも興味深かったのは、これまでの人生を精一杯生きてきたという事実があつた

ということです。病気を患つてしまつたことだけでも辛いことだと思うのですが、患者が患者の看病をすることや、無断外出がばれると監房に入れられること、働いてもわずかな額の園内だけで使えるお金しかもらえなかつたことなど、人間として尊厳が守られていたのかというと必ずしもそうとは言えない暮らしだつたのではないかなどを感じました。子どもを産めなくする手術や世間体による差別的な目も紛れもない事実で、それにより心身ともに傷ついた方がどれだけいたかと考えると胸が痛くなります。それでも、今日まで懸命に生きてきた事實を根岸さん、滝田さんから直接伺うことことができ、ひどい生活の中でも生きることを諦めずに困難を乗り越えてきたのだなと感慨深いものがありました。決して幸せな生活ではなかつたと思います。にもかかわらず、滝田さんは「これまで精一杯生きてきた。何も悔いはない。」とお話されていました。病気と向き合い長い間生きてきた根岸さん、滝田さんからそのようなお話を聞けて、私も刺激を受けました。まだ私は約二十年しか生きていませんが、精一杯生きて悔いのない人生にしたいと思いました。

園長先生のお話にもありましたが、今も昔も療養所に多くの人が留まつてゐる状況は変わっていません。

しかし、周囲の環境は大きく変わつたと思ひます。昔のように隔離されて周囲との交流があまり望めなかつた状況ではなく、今では私たちのように大学生など若い人たちもこうして訪ねていつてお話を聞きに行くことができるようになりました。納骨堂やお寺、教会など実際に訪れてみるとイメージも大きく変わりました。少しだけでも療養所の暮らしや文化に触れて、そこで生活していた人々に思いを寄せられたということは、とても貴重な経験でした。特別に何かしたわけではなかつたのですが、実際に見て聞いて触れたことで得られるものは大きかつたです。ぜひ、たくさん的人に訪れてほしいと思いました。

最後になりますが、療養所内を案内してくださつた職員さん、自治会長さん、お話を聞かせてくださつた園長先生、根岸さん、滝田さん、貴重なお時間を割いてください、本当にありがとうございました。

野の花の微笑み

ほほえ

比 良 信 治

(15) 新生活のスタート

雪が溶け始めると共に、春が訪れるのは北国の風習である。文太郎と恵子の二人の間も、春の訪れと共に新生活が待ち構えていたのである。イエス・キリスト

のご復活祭の後に、かねて約束された二人の新生活もスタートするのである。

二人の結婚式は五月の末に小樽の富ヶ丘教会で行われた。式には恵子の姉夫婦と、文太郎の方は勤め先の施設長だけのいたつて簡素なものであつた。入所している母の出席は無理で、親戚の人や友人には案内せず、お知らせに留めたのである。

それは恵子が再婚であることと、母と同じ入所していたことを、あえて知らせることを避けたのである。母も恵子もハンセン病は治っているのであるが、世間のうるさい風潮を避けるためにも、教会の神様のもと

に、新生活を出発したのであると、文太郎も恵子も簡素な出発を選んだのである。そして、職場での結婚披露を兼ねたパーティーは別途に盛大に企画されたのである。

二人の新居は、住み慣れた家から、街の中心街に建つた3DKの新居に移つた。文太郎の父からの古い家は、文太郎の法人施設が借り受けて、職員の住宅用にしたのである。それは今の施設長の発案であつて、母のことを考えると助け船であつた。母が何時退院しても帰つて来る家は確保されたので、文太郎もほつとしたのである。

新居が決まつたことも嬉しかつたが、何よりも保母として働く職場が決まつたことが嬉しかつた。青森で会つた、札幌の藤学園本部のシスター多田かなえ理事長の助言が助けとなつて、小樽藤学園保育園の導きと

なつたのである。この朗報を聞いた施設の帰り、文太郎は教会に寄つて感謝のお祈りをした。駆け付けた恵子も神に感謝を捧げて神父に保育園に就職できることを報告したのである。

その翌日、文太郎と恵子は津軽海峡を渡つて青森へ飛んだ。駅の近くのレンタカーに向かい、白いレンタカーを一台借りて、母のいる療養所へ向かつた。療養所では、まず園長に結婚と恵子の勤め先の報告をした。そして、母を車に乗せて弘前に出掛ける許可を貰つた。園長には手紙と電話で計画を打ちあけて許可を得た内容であつた。母の付き添いで、園の看護婦が一人付いた。かねて、母の希望であつた弘前城とりんご園を見ることであつた。母は歩くことは無理で車椅子を用意していた。母の希望を叶えてあげたいと、園長にもお願ひした一泊の弘前行きであつた。実際は弘前の隣りの大鶴温泉泊まりで、距離にすると弘前までは30km、大鶴温泉までは40kmであつた。思ったより近い距離だつたが、その中心に岩木山、別名岩木富士が弘前平野にそびえていた。

鉄道も国鉄で行けば、新青森、新城、浪岡、川部など、弘前までは八つ目であり、私鉄として弘前鉄道など幾線も津軽半島を走つてゐるのである。

「母さん、お城が裏側から見えるよ。桜の花もここに

青森に城がないように、早くから津軽の殿様は弘前城におさまり、平野と一郡を治めていた。北海道との交易も昔から秋田、弘前のルートで結ばれていた。津軽半島の竜飛岬より北海道の松前、江差ルートが結ばれていたのである。しかもキリスト教が弘前の殿様に伝わるように、外人宣教師の宣教は京都、江戸を通じて密かに流れていた。津軽半島の十三湖の周辺には隠れキリストンの部落もあるということだつた。

弘前へ向かう道は、文太郎は初めてであつたが、幸いに同行した看護婦がよく知りえた道だつたので、一時間もしないで弘前公園に入つた。弘前城が見える近い所まで車を寄せて、車の外に立つて眺めるのが精一杯であつた。桜並木が散りかけていたが、その匂いをかぐだけで、母は満足だつた。初めて見るお城、白い壁に瓦ぶき屋根、そそり立つ城壁が太陽に照らされて光り輝き、何百年の歴史を匂いたせていた。それはまさに一幅の絵になつてゐた。

木造の風変わりな建物は美術館であつた。どれも国宝級の建物であつた。車は徐行しながらゆつくりと公園の中を走り抜けた。公園の外に出た所で、車はストップして、再び文太郎は母に声を掛けた。

来ると満開だね。母さんいい所に来たねー。」

「ありがとうさんよ。よかつた。お城も公園も美しくてね。念願かなつたわー」と、母は車の窓から外を眺めた。

文太郎は母の笑顔を見つめて安心した。そばに付き添つている恵子が、

「よかつたわ、また秋に来れるといいわね、お母さん」と言つて、「近くの茶店でお土産買わないと、文ちゃんお店に寄つてよー」と催促した。

文太郎と恵子は茶店に寄つて、母の同室の三人や看護婦の詰所などへお土産を買った。園長には温泉地からお土産を買うことにして、車は大鷗温泉へと向かつた。

川の淵にある大鷗ホテルに車が入つたのは夕方であつた。母は車イスに乗つて、きしむ廊下を歩き、川の流れも見えるベッド付きの部屋に入つた。

母は何十年振りの温泉であつた。看護婦と恵子の介添で楽しみであつた温泉に入つた。二人に抱えられるようにして、浅い温泉浴室に入り、全く久しぶりに温泉に浸かつた。その温かさ、身体のしびれるようなぬくもりを久しぶりに味わつた。もう死んでもいいと思う程の喜びであつた。

休む部屋はベッド一台が付いている部屋であつた。

文太郎と恵子は、母と一緒に部屋になり、看護婦さんは隣室に休んで貰つた。

文太郎と恵子は母に、小樽の住まいと保育園の報告を始めた。母はベッドに身体を委ねて聞いているうちに夢の世界へ向かつた。

朝目が覚めると、川の流れる音がリズムよく響いてきた。恵子が一番早く目覚めて起きた。やがて文太郎であつた。母はよく眠つていて、手足を伸ばしてみる程、よく休んでいた。

「おはよう」と文太郎が叫ぶと、母も恵子も「おはよう」と唱和した。

「母さん、よく眠つていたね。ここは温泉だよー」

「そうだわ、大鷗温泉よ、とてもいい温泉だわ」

「今朝も入りなさいよ。長生きするよ。看護婦さんに頼むとして、お願ひしなくてはー」

と文太郎が言うと、恵子はあわてて脚のギブスを付け始めた。母は知つているが、看護婦の野呂さんは、ギブスのことを知らなかつた。左足のけがのもとでギブスを持つてゐるのだ。

やがて看護婦の野呂さんも来て、母は朝風呂に行つ

て來た。

四人は遅い朝食をゆつくり済ませて温泉を出発し

う。十三湖など歴史のある地もやがて脚光を浴びることだろう。

た。車は野呂さんの案内により果樹園地帯に入つた。林檎の果樹がどこまでも連なり、袋掛けの中から赤い実を見せていた。早生の林檎は姿を見せていた。野呂さんの知り合いの果樹園により、その早生の林檎は大きな袋に買い求め、もぎたての林檎を銘々がかじつて車に乗つた。歯のいい文太郎は忽ち一個を食べ終わり、二個目の赤い林檎にかぶりついた。

果樹園を抜けて林道に出ると、帰り道として五所川原を選んだ。作家の太宰治の実家・斜陽館を見て五所川原駅に来ると、立ねぶたの巨大人形を制作している作業を見ることが出来た。裸同然の姿で男女が大きな人形の組立作業をしていて、本体は何か不明であるが、首が細長い人形であるに違いない。飛行機のように翼を前と後ろ持つた化け物のようであつた。

その立ちねぶた祭りの熱気を見ながら車を東へ走らせた。津軽線もやがて新幹線に組み入れられる。むかし、津軽半島の竜飛岬を訪ねたことがある。三厩より船に乗つて松前に渡つたことがあると、文太郎は思ひ出していた。海峡のトンネル口はどこになるのであるうか。いずれにしても蟹田の町を過ぎてからであろ

めよく福祉課にも頭を下げて、自分の部屋に戻つた。疲れたとみえて、布団に入ると眠つてしまつた。

佐久間文太郎と恵子は、翌朝六時発の青函連絡船に乗つて小樽に向かつた。一番早い船便を使つても小樽に着くのは午後一時半過ぎであつた。

二人はアパートに帰ると着替えをして、それぞれ勤め先に向かつた。文太郎は園長に報告すると、意外なことを知らされた。それは青森松丘園の復帰者豊岡銀蔵が大腸ガンで市立病院に入院したということであつた。手術は一週間後ということであつた。文太郎は明日の午後でも入院先を訪問することを約束した。

翌日、佐久間文太郎は、午後二時過ぎに市立病院に行き、豊岡銀蔵を訪ねた。銀蔵の話によると、大腸などの痛みはなく、施設内部の検査によつて発見されたものであること。病院側は手術によつてガンを摘出すことであるといふことであつた。一週間後に執刀すること、執刀によりガンをとると一週間後に退院出来るということであった。文太郎は園長にその旨報告し、親戚の人にも一応経過を知らせた。

一週間後、その手術の日に文太郎は病院に出掛け

た。手術は四〇分位ということであったが、二時間もかかつた。それはガンが転移していて、腎臓にも広まり危篤状態であった。医師からは身内の人を呼ぶように言われた。いとこが来たが三名だけだった。残念ながら豊岡銀蔵は八十二歳で亡くなつた。従兄弟が市内の葬儀店で盛大な葬儀を行つた。しかし、弔問客は老人ホームのお年寄りとボランティアの友人だけであつた。形の上では老人ホームの園長が葬儀責任者となり、葬儀を取り仕切つた。青森の松丘園の白木園長よりも弔電が届いたのが幸いであつた。

文太郎は銀蔵のために、奉仕したボランティア十四人の友人に心から感謝の手紙をしたためて送つた。その手紙の中に、折から花開いたばかりの『はまなすの花』をセロファンに包んで差し上げたのである。

(完)

人事異動

採用

《期間業務職員》

調理師 太田 おおた

容子 よう子 (栄養班)

(平成28年4月5日付)

看護助手 富樫 とがし

明那 はるな (中央センター1階)

《パート職員》

事務補助 矢内 やない

朱音 あかね (庶務課勤務)

(以上平成28年5月1日付)

【辞職】

看護助手 柿崎 柿崎

純子

(平成28年6月30日付)

どうぞよろしくお願ひします

本年4月から当園で働いている7名の方々です。
どうぞよろしくお願ひします。



長利 綾美(おさり あやみ)
①病棟 看護師

①勤務場所

- ②あなたが自慢できることは何ですか?
③一言挨拶

②ケーキ作り

- ③四月から病棟に配属になりました長利です。一日でも早く仕事を覚え、入所者様に安心して頂けるよう心温まる看護ができるよう頑張つていただきたいと思います。



黒田 聰(つたや さとし)
①栄養班 栄養士



長利 弘美(おさり ひろみ)
①中央センター2階 看護助手

②何事にも一生懸命取り組むこと

- ③ハンセン病の施設は初めてですが、皆さんに喜んで頂ける食事の提供を目指して頑張ります。
よろしくお願ひします。

②ホタテの殻外しが早い！

- ③日々、入所者様、先輩職員から深い学びいっぱいの毎日です。笑顔を忘れず、これからも頑張つてていきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

相内 千恵子(あいうち ちえこ)
①施設管理係



②健康

③前任者である佐藤さんの足元にも及ばない為、ご迷惑をおかけすると思います。皆様からのご指導を頂きながら、少しでもお役に立てたらと思います。

太田 容子(おおた ようこ)
①栄養班 調理師



②何事に対しても全力投球です。

③四月から給食で勤務しています。入所者の皆様が楽しく安心安全に食事をしていただけるように努めてまいりますので、よろしくお願ひ致します。

唐牛 由紀(からうじ ゆき)
①福祉室 縫工部



②手先を使うことが得意です。

③縫工部に勤務となりました唐牛です。新しい仕事と早く覚え勉強し、一生懸命頑張りたいと思います。よろしくお願いいたします。

②早寝早起

③五月より看護助手で採用になりました富樫明那と申します。一日でも早く入所者様の名前を覚え、先輩の方々に一生懸命学び頑張ります。

一般財団法人 松丘保養園松桜会

賛助会員募集のご案内

松丘保養園松桜会は、「ハンセン病問題の歴史等の啓発活動を行い偏見差別のない社会の実現に寄与すること」を目的に活動しております。

松丘保養園や入所者自治会の支援活動、差別や人権問題の啓発活動、地域住民の皆様との交流活動、さらには「松丘みどりの森プロジェクト」による自然環境保全活動に貢献していくことを目標としております。

この活動が皆様の心に留まるよう、賛助会員へのご協力をお願い致します。

●事業内容

1. ハンセン病に関する正しい知識の普及事業
2. ハンセン病問題の歴史を正しく普及啓発し、人権の増進を図る事業
3. ハンセン病施設入所者に対する支援事業
4. その他この法人の目的を達成するために必要な事業

●年会費

個人 1口 1,000円 団体 1口 5,000円

●お問合せ

一般財団法人 松丘保養園松桜会

〒038-0003

青森県青森市石江字平山 19

国立療養所松丘保養園 福祉室内

☎017-788-0145

自治会日誌 ○印 自治会

三月中

5日○「松丘保養園の将来構想をすすめる会第8回総会」に執行委員2名出席

7日○早稲田大学平山郁夫記念ボランティア客員教授西尾雄志氏、ユネスコ記憶遺産登録準備資料調査の為來訪

8日○施設整備委員会（石川会長）

10日○保健科運営委員会

11日○第9回執行委員会

14日○みどりの森プロジェクト会議（佐藤副会長）

” ○国立感染症研究所ハンセン病研究センター
森修一氏來訪

15日○倫理委員会（石川会長）

18日○除雪作業員5名、作業終了の挨拶に來訪

” ○江谷副園長 退職の挨拶に來訪

22日○秋田県ふるさと芸能慰問

23日○大橋正和氏 ユネスコ記憶遺産登録準備資料調査の為來訪（～24日）

24日○甲田の裾編集局運営會議

” ○3／24付採用職員1名挨拶に來訪

24日○3／31付退職職員2名挨拶に來訪

25日○3／25付退職職員1名挨拶に來訪

” ○3／31付転出職員1名挨拶に來訪

26日○ハンセン病について学ぶ連続講座「まなびの杜第2回」で石川会長が講演

” ○男八十三歳逝去 秋田県出身

28日○真宗大谷派北海道教区6名来園 石川会長が講演

29日○株青森連合清掃センター中村哲馬氏 挨拶に來訪

30日○東谷商店との売買契約

31日○3／31付退職、転出職員 挨拶に來訪

” ○離任式

四月中

1日○4／1付採用、転入職員挨拶に來訪

4日○園幹部と執行委員顔合わせ

5日○4／5付採用職員1名挨拶に來訪

8日○第10回執行委員会

22日 歌っこ広場

23日○「まなびの杜第3回」講師 樹木医 逢坂淳先 生 桜の苗木百本植樹

25日○第4四半期自治会会計業務監査（～26日）

27日○毎日新聞青森支局 夫彰子記者來訪

28日○平成28年度観桜会（落語家・桂福丸さんの独演会）

五月中

2日○5／1付採用職員2名 挨拶に來訪

11日○青森市視覚障害者の会 内田氏、外1名來訪

12日○保健科運営委員会

13日○第11回執行委員会

14日○男九十四歳逝去 青森県出身

16日○曹洞宗 寺田氏來訪

18日○第12回執行委員会

20日 歌つこ広場

26日○第32回（平成28年度）歌謡交流大会

27日○倫理委員会（会長）

28日○「まなびの杜第4回」①講師 松桜会理事 中

條資則先生 ②松丘保養園園長 川西健登先生

地震に、またもや多くの尊い人命が奪われてしまい、家屋の倒壊などライフラインにも甚大な被害が生じた。また熊本県民にとつてはシンボル的存在でもある熊本城にも大きな被害が出た。そして今なお一人の大学生の行方がわからないままである。ご両親の悲しみはいかばかりか心が痛む。一刻も早くご両親の元へ帰られることを心より祈ると共に、熊本・大分の両県の一日も早い復旧・復興を祈念する。

さて、今年も松丘緑の森プロジェクトの一環として、四月二十三日「まなびの杜講座」で、「日本花の会」より寄贈された桜の苗木百本を松桜会会員、近隣町会、入所者、職員が東側の旧軽症療養院跡地に植樹。さらに六月八日には、青森ロータリークラブより寄贈されたハナカクイドウ二十四本、枝垂桜の苗木三十本を同会員やその家族、石江地区町会、県立保健大生、米山奨学生、入所者、職員など総勢八十名で、正門付近や西側寮跡地へ植樹した。

今後も植樹は計画されており、西側の樹木の間引、遊歩道の整備なども予定されている。先人達が築いた豊かな緑を守り、維持管理することは私達に残された大切な課題だと思う。そして、その緑を通じて多くの市民との交流が深まることを期待したい。

編集後記

私達は改めて地震の怖さを思い知らされた。四月十四日夜に熊本地方で起きたマグニチュード7の大

（佐藤勝）

園内の出来事

平成28年度観桜会（4月28日）



今年は落語家・桂福丸さんをゲストにお迎えして、上方落語を聞きながら観桜会を楽しみました。

第2回松桜会コンサート（6月14日）



チェロ奏者 菱倉新緑さんによるチェロコンサート。「南部牛追い歌」「八木節」なども演奏。

さくら保育園畠づくり（6月16日）



入園者の指導のもと枝豆の植付け。



青森県ハンセン病パネル展（6月20～24日）



県庁北棟ロビーにて開催。

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で107年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地

青森市大字石江字平山十九

園長 川西 健登

保有敷地 二三〇、五四八平方米

(六九、八六三坪)

建て面積 三〇、三五八平方米

(九、一九九坪)

延べ面積 三六、〇三六平方米

(一〇、九二〇坪)

交通案内

□電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車
(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車
(車で約5分)

□バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行

2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石
行き 共に松丘保養園前下車

□航空機の便

青森空港より (車で約30分)

□高速自動車道の便

青森ICより (車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三 内露園 (1km) と国の特別史跡指 定の三内丸山縄文遺跡や県立美術 館 (2km) 等があります。

発行所

一般財團法人 松丘保養園松桜会

所在地

〒〇三八一〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話 (017) (788) 〇一四五・〇一四六

発行人 川西 健登

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町二丁目十一一十六

青森オフセット印刷株式会社

電話 (017) (775) 一四三一一番